

## 第6回 実践場면을科学する—こんな時どうする？Ⅲ ～“みんなと一緒”が難しい～



講師 岡村 由紀子 氏

### 1 はじめに

今日のテーマは「“みんなと一緒”が難しい」です。大人が思う“みんなと一緒”というのは、人と同じことをしていると安心するということです。しかし、ここでいう“みんなと一緒”は違います。子どもが物を取り合って、痛い思いをして、泣いてエネルギーを発散して、「自分と同じ物を欲しい人がここにもいるんだ」と思う場面で、保育者がどのような指導をするかによって、子どもの表れは変わってきます。人は、一人では成長できません。

絵本を読むことも同じです。自分のイメージだけで読むのと、友達と一緒に読むのでは感じるものが違います。保育所や幼稚園には、“みんなといると楽しい”という土台があります。その上で、“何かあった時にはどうしたらいいかを一緒に考えて、また楽しくしようね”というのが、ここでいう“みんな”なのです。

### 2 <事例1>

#### 話を聞かなければならない場面で、よくしゃべる

4歳児のAくんは、聞く場面でも自分の言いたいことを言い、保育者が注意をしても一時静かになりますが、またすぐにしゃべり始めてしまいます。保育者は、待つことが難しく、我慢ができない子と考えます。また、他者理解が難しいとも考えます。よくありそうな対応が次の3つです。

- ①「おやくそく表」をつくる
- ②毎日決まった時間に、1対1で話を聞く
- ③「話す人マイク」を使う

### (1)「おやくそく表」について考える

言葉が生まれる時の認知の発達、記憶力の発達です。記憶の発達がないと、ごっこ遊びはできません。表にしたり、順番を決めたりする「おやくそく表」も、記憶を支えるためのものです。療育では、このように、1対1で視覚刺激をし、行動を構造化していくことをよくやります。

しかし、思うようにいかず、曖昧なことがたくさんあるのが世の常です。人が生きていく社会は、不確かで曖昧です。だからこそ私は、通常場面での枠をたくさん覚えて生きていくのは違うのではないかと思うのです。

集団保育の財産は、構造化で学ぶのではなく、ここにいる友達や保育者との人間関係の中で生き、育っていくということにあるのです。

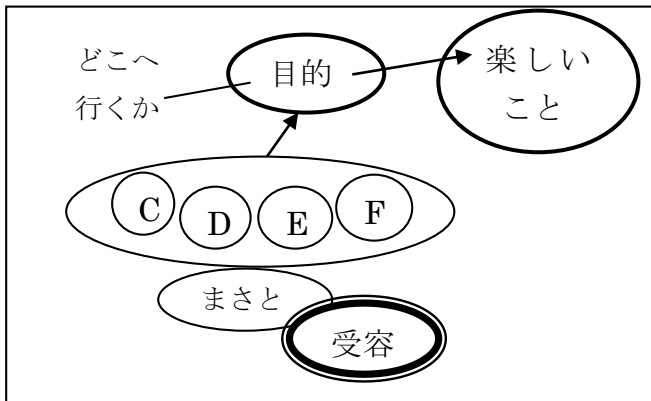
### (2) 実践『おさんぽ どこにいこうかな?』

まさと君は、よくしゃべる子です。だいち君は、まさと君が好きな子です。

保育者が「今度のお弁当の日、どこに行くか、相談しようね」と子どもに声をかけます。すると子どもはいろいろ言い始めます。そんな中、まさと君はテレビのヒーローの話をし始めます。隣のだいち君も、その話のにります。そこで保育者は、「お話を聞ける？C君」と、話を聞いているC君に聞きます。すると、首を横に振るC君。他の子も「聞こえない」「うるさいよ」と言います。その様子に気づいたのは、だいち君です。まさと君は、そんなだいち君を見て、話す相手がなくなったため、話すのをやめました。でも、我慢ができなくなり、またヒ

ローの話を始めました。そこで保育者は、「そうかあ、それは強いんだね」とヒーローの話を読み、「でも今は、お散歩でどこに行くか決めているから、終わったらお話聞かぬ」と言います。そうすると他の子が、「そうだよ。今はお散歩の話をしているんだよ」「川がいい」「カエルいるもん」と言います。保育者は、「カエルのいるところがあると話をしているけれど、まさと君、カエル好き？」と聞きます。保育者は、まさと君がカエルが好きなことを知っています。すると、だいち君が「まさと君、カエル好きだよ」と答えます。ここでまさと君のカエルの知識に、「まさと君、すごい！」とみんなが注目します。そして、「どこに行くか」の話が進み、カエルがいるところに決まりました。その後、まさと君がヒーローのカッコいいところを、身振り手振りでやってみせてくれました。

この場面の保育を構造化すると、次のようになります。



子どもの側から見ると、「ぼくも」しゃべりたい、「今」しゃべりたい。だから、この気持ちを一点に集中させるには、「なぜここに集まるか」をはっきりさせることが大事です。この実践では「今度のお散歩は、どこに行くか」と集まる目的をはっきり子どもに伝えています。お弁当を持って出かけるのは、子どもにとって楽しみなので、子どもは集まってきます。「時間だから片づけて、みんな集まって」と言うよりも、「今からね、楽しいことがあるんだよ」

という目的を持って話し合いをするのです。

保育者はまず、集団へ指導します。それでもまさと君はおしゃべりをやめないから、次は個への指導になります。まずは受容して、そして共感するのです。ヒーローの話に「すごいねえ」と共感した後、「でもね、今度どこへ行くかをお話しているんだよ」と、まさと君に目的を伝えます。保育者は個に話していますが、集団の子どもたちも聞いています。その中で、まさと君の関心のある内容を話題にすれば、少しずつカエルをキーワードに集中してくるのです。

すぐにしゃべってしまうのは、自己コントロールが難しいからです。人に迷惑がかかるからと人の気持ちを伝えても、自己コントロールがない子には難しいです。その代わりに、自分にとって楽しいことだと思ったら、自己コントロールは動き出します。

指導のポイントは、「楽しみがあると我慢ができる」「共感が安心を生む」です。そして大好きな人がいると、その子の心の通訳になります。だから楽しいことを目指し、受容の気持ちでやっていくことが大切です。1対1で保育者が何とかしようではなく、まさと君のやっていることに対して、みんなが思っている言葉でまさと君に言えばいいのです。

### 3 <事例2>

#### ご飯が配膳されると、すぐに食べてしまう

5歳児のH君は、給食の時間、「まだだよ」と言われると、少しは待てますが、すぐに食べてしまうため、保育者からずっと注意されてしまいます。待つという状況が理解できていないのか、我慢する力が弱いのか、自己コントロールができないと考えます。よくありそうな対応は次の3つです。

- ①給食の時間の流れを知らせる
- ②「待つ」サインを決める
- ③H君への配膳を最後にする

## (1)

### 「給食の時間の流れを知らせる」について考える

写真やカードなどを使って、視覚的にわかりやすくする方法があります。H君は5歳児ですが、みんなで「いただきます」が難しいため、保育者は写真やカードを提示することを考えます。情報の入手は7、8割が視覚からです。聴覚で情報を入力するのは高度なため、小さい頃は視覚で情報を処理します。Hくんにとって、写真やカードは有効と考えます。

乳児の日課はとても大切だと言われています。各園にあるリズムが、見通しを持つということにつながります。見通しは、記憶の力がベースです。それがやがて、少しだけ我慢ができることにつながっていきます。そして2歳児くらいになると、保育者に言われなくても食事の後、自分で口をふき、パジャマに着替えようとします。「お散歩行こうか」と言うと、「帽子を被りなさい」と言われなくても、散歩に行く時には、帽子を被るのだという記憶を頼りに見通しを持っていきます。

### (2)実践『グループみんなでいっしょにたべたい』

たいが君は、給食の時間、待っていることが難しく、すぐに食べ始めます。保護者に聞くと、家でも同じです。園では、たいが君のいるグループを配膳台の傍にして、待つ時間が短くなるようにしました。周りの子が、たいが君がすぐに食べる様子を見て、「まだ食べないよ」「いただきますしてからだよ」と声をかけます。たいが君は「わかった」と返事をしますが、なかなか変わりません。たいが君の様子も気になるのですが、それよりも気になるのは、周りの子どもたちのかける言葉が温かくなく、「何回言ってもいけないことをしているから、保育者の代わりに注意してやっている」ことを感じさせ、きつくなっていることでした。たいが君の心には、ルールが落ちないから変わらないのです。なぜこのルールが必要なかわからない限り、彼は変わりませ

ん。

普段の保育でもこのような場面は多く、保育者もその子に声をかける率が高くなります。「〇〇ちゃん、もう集まる時間よ」とその子の名前が他の子より数倍多くなるのです。名前後に、「なんて素敵でしょう」が続くのではなく、ルールについて話します。そうすると、周りの子どももその子に対して冷たくなっていきます。子どもはみんな、たいが君が「お腹がすいた」「待ちきれない」とわかっています。でも、ルールの中身より、それをどう思うか、みんなの気持ちを伝えることの方が大切です。

Cちゃんは「グループさんみんなと一緒に食べたいよ」と言いました。「グループで食べるんだよ」と言われるのと、「グループで一緒に食べたいんだよ」と言われるのでは違います。ルールという形だけで言われるより、子どもの気持ちに温かいものが流れます。心と心が通い合うのです。このような時、保育者は「そうだね、仲間だものね」と、気持ちを強化する言葉を伝えます。

たいが君は何も言いませんが、みんなの話をしっかり聞いています。ルールは心に届きませんが、人の気持ちは彼には落ちるのです。人に優しくされたら優しくなれる、愛された子は人を愛する子になる。そういう人と人との関係性があるのです。

指導は二種類あり、一つは物の関係性で指導していくこと。もう一つは人の関係性を使って、行動に変化を生じさせていくことです。集団へ指導をすることで、「みんなで一緒に食べたいよ」「違っても仲間なんだよ」と言える子どもが育ってくるのです。

その後、たいが君は時々食べそうになりますが、「クイズが終わったら食べるんだよ」という友達の言葉に「ハッ!」とします。食べようとするところを、自分で気づいて我慢する、自律的自己コントロールの形成が人的環境の中で育っていくのです。

#### 4 <事例3>

##### 「気になる子」が複数いてまとまらない

4歳児16名のクラスに、気になる子が3、4名います。活動にワンテンポ遅れる、一人でずっと遊んでいる、すぐに他の子を叩く、秋になってもクラスがまとまらない。朝から走り回る子に引きずられて複数の子が走り出し、活動がなかなか始まらない。どの園でも、このような子どもの表れに、保育者が悩んでいます。よくある対応は次の3つです。

- ①個別の加配をつける
- ②「気になる子」の特性をとらえる
- ③見通しを明確にする

##### (1) “気にならない子どもたち”は

##### 何をしているのか

支度ができ、ずっと黙って耐えて待っている子や、人が泣いていても関係ないという顔をしている子などの“気にならない子どもたち”をもっと気にした方がいいと思います。自分の前に人が割り込んできた時、3歳なら「ここは私がいたから、後ろに行って」と言えなくてはなりません。そのような力を育てているかどうかが問われます。それが集団の力であり、その子だけの問題ではありません。

みんなに拒否され、その子が泣いて物を投げた時、保育者が「〇〇ちゃん、また。壊れるでしょ」と言うのではなく、「投げたいくらい悔しいんだね。我慢できないんだ。じゃあ、ここで待ってようね」とその子の行為について話すのです。そうすることで子どもは、“自分は守られている”“そういう行為はしてはいけない”“どんな時も言葉で言えば、先生は自分のことを聞いてくれる”という関係性を積んでいくことができます。

これまで「やめて」と言っていた子どもたちが、「叩かないで。こういう時は仲間に入れてって言うんだよ」とルールの説明をするようになります。だから、人的環境からアプローチしていくことが大切

です。保育者は「もう謝ったから、仲間に入れてあげて」と言いがちですが、決定権は、ここで遊んでいる子たちにあります。「もう叩かない」と言ったら仲間に入れるという、そんな甘いものではないという経験を子どもたちはしていくのです。

違っているけれどそれを認め合うには、どの子にも平等であることが大切です。困っている気持ちを聞いて一緒に考えることで、違っていることをお互いに理解し合っていくのです。違っているけれど、どの子も楽しいという共感と仲間づくりが必要です。目に見える行動が一緒でなくても、“気持ちが一緒”を大事にします。

どの子も楽しいと感ずるためには、「自分にとっていやなことはいやと言う」ことと、「友達がいやだと言うことはやらない」ということを、クラスづくりの土台にします。それにより、「いやなことはいや」と言える力が生まれてきます。保育者の喧嘩両成敗の指導では生まれません。困ったことやトラブルが、子どもたちの発達や育ちのチャンスになります。

#### 5 終わりに

日常の保育では考えることが少ない「保育とは」「子ども像とは」などの論議を、園で年に1回はすることが大切です。園目標や子ども像についてみんなで確かめ合うことで、子ども観や保育観を豊かにしていくことができます。そうすることで、保育者集団の土台が豊かになっていきます。

第6回 保育者資質向上研修会 平成29年12月13日 会場：焼津公民館
---